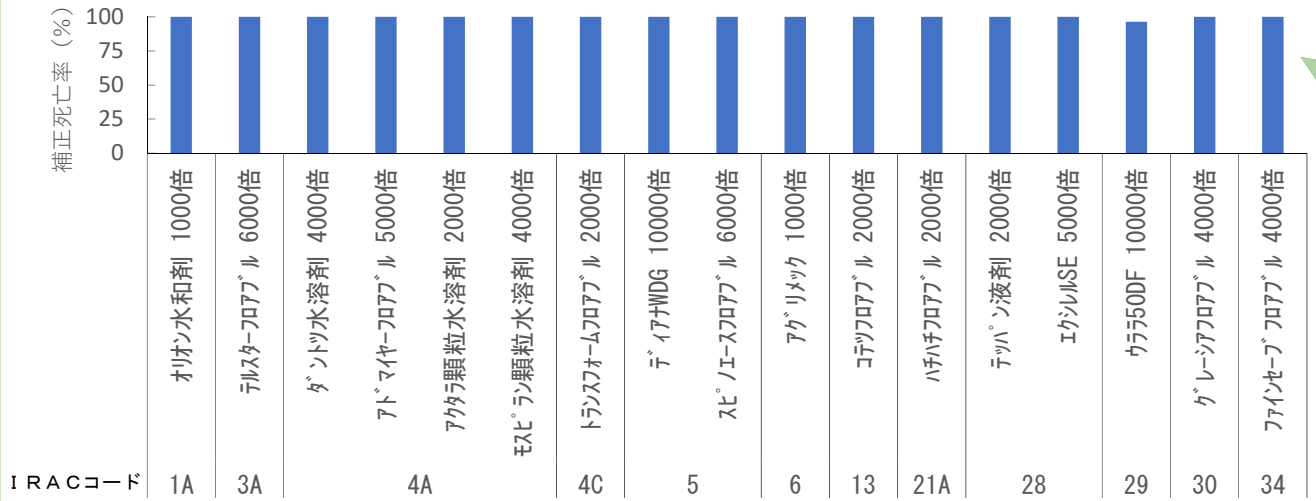
ハナアザミウマに対する各薬剤の効果

カンキツ着色期においてハナアザミウマの加害が恒常化しているため、本種に対する各種薬剤の防除効果について検討したので紹介する。

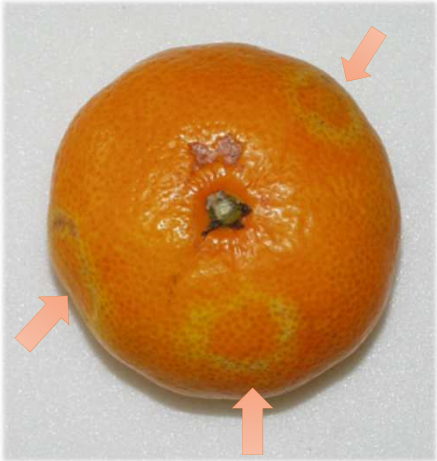
直接殺虫試験（薬液が直接虫体にかかる条件での試験）



ハナアザミウマに対する各薬剤の効果（直接殺虫効果）

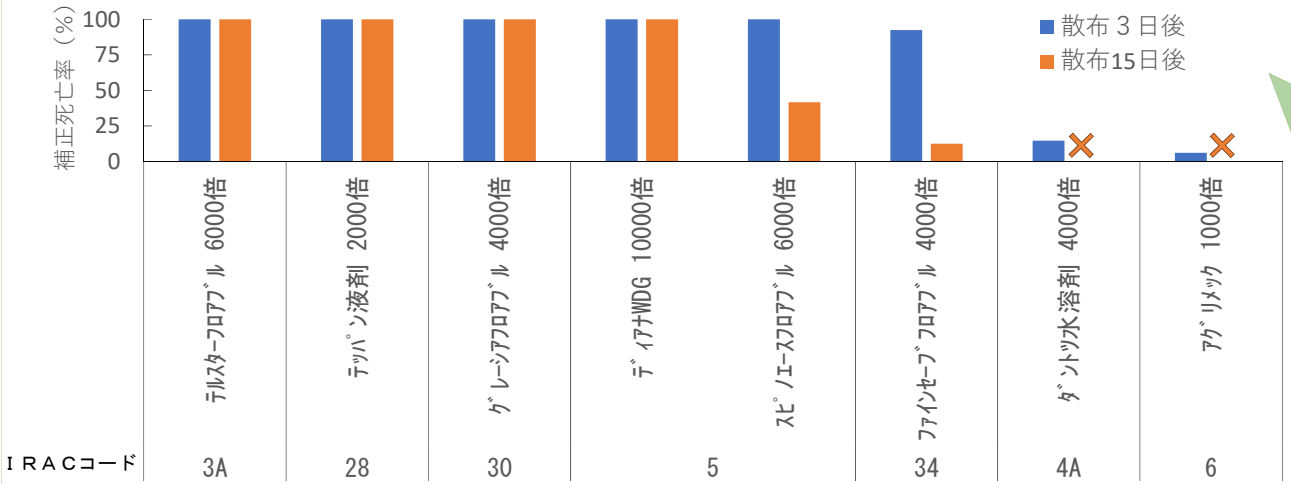
直接薬液がかかった場合、いずれのアザミウマ登録剤も効果は高い。

ただし、本種は園外のセイタカアワダチソウ等から連続的に飛来してくるため、残効性が求められる。
このため、残効性についても評価した。



ハナアザミウマによる着色期の被害果

残効試験（果実に散布後、3・15日後に放虫：虫体には直接薬液はかかっていない条件での試験）



ハナアザミウマに対する各薬剤の効果（残効）　✕：散布15日後は未実施

テルスターフロアブル、テッパン液剤、グレーシアフロアブル、ディアナWDGは、散布15日後でも効果が高く、残効が長い。
一部薬剤は残効が期待できない。

※県内の一部地域では、露地かんきつにおいても、**ミカンキイロアザミウマ**による類似の加害が確認されています。両種の見分けは肉眼では難しいため、発生が疑われる場合、病害虫防除所等の指導機関にご相談ください。

ハナアザミウマ雌成虫

ミカンキイロアザミウマ雌成虫（褐色型）

本種に対しては、各種アザミウマ登録剤の効果は高いものの、**直接薬液がかからない場合には効果が低い薬剤があるため**、気温が高く連続的に園外から飛来している場合などでは**残効の長い薬剤で対応**する。